

接続語をつかむ

学習日 月 日

■ ポイント ■

接続語とは

接続語とは、ことばとことば、文と文、段落と段落の関係を明らかにしながら、前後をつなぐ働きをする「つなぎことば」のことをいいます。

接続語の種類

接続語は、その前後の関係を示す働きから分類すると、おむね次のようにになります。

(1) 順接の接続語：前に述べられていることが原因や理由をあらわし、後にその結果をあらわす内容がくる関係を示す場合に用いられます。

例 だから、それで、したがって、すると、ゆえに
逆接の接続語：前に述べられていることから予想される内容とは反対の内容が、後に続くことを示す場合に用いられます。

例 しかし、だが、けれども、ところが、が、でも
並立の接続語：前後を、同等（対等）な関係の内容で並べていることを示す場合に用いられます。

例 また、および
りい加の接続語：前のことがらに、新たなことがらを付け加えることを示す場合に用いられます。

例 そして、しかも、さらに、それから、そのうえ

(5) 説明の接続語：前に述べられていることがらについて、

- ①その理由を説明したり、②補足したり、
- ③言いかえてまとめたりすることを示す場合に用いられます。

例 ①なぜなら、②ただし、③つまり、すなわち
選択の接続語：前に述べたことがらか、後に述べたことがらのどちらかであることを示す場合に用いられます。

例 または、それとも、あるいは

(7) 話題の転換をあらわす接続語：前に述べたことがらをいつたん終え、別の話題や視点を変えて新たに話題を展開していくことを示す場合に用いられます。

例 ところで、さて、では、それでは

※「順接」「逆接」等の関係を表すことばは、小学校の段階では、特に覚えておく必要はありません。あくまでも、それぞれの接続語の働きを理解することが大切です。

接続語のつかみ方

(1) 接続語が何と何をつないでいるかを考えます。

- ① ことばとことばをつなぐ
→この場合、文のとちゅうで接続語は用いられます。
- ② 文と文をつなぐ
→この場合、文の初めに接続語は置かれます。
- ③ 段落と段落をつなぐ
→この場合、段落の初めに接続語は置かれます。

接続語を適語として空所に入れる場合の考え方

- (1) の「何と何をつないでいるか」をつかんだら、次につ

7 心情・性格をつかむ 1

学習日 月 日

■ ポイント ■

心情・性格

隨筆の筆者的心の状態や心の動き、物語・小説の登場人物の心の動きを「心情」といいます。「心情」は「気持ち」といいえることもあります。一方、筆者や登場人物の「人がら」のことばは「性格」とよびます。心情と性格のちがいは、心情が場面に応じて変化するのに対し、性格は変わりにくいというところですが、物語中の大きなできごとの前後では登場人物の人がらが変わるというのはよくあることなので、あくまでも程度の問題として受け止めておきましょう。

心情（気持ち）のつかみ方

- (1) 登場人物（書き手）の心情が直接表現されている部分に着目する。
- (2) 登場人物（書き手）の行動や動作、会話のことばや口調などに着目する。
- (3) 情景をえがくことによって、その場の人物の心情を重ねて表現している部分に着目する。

心情と場面の関係

- (1) 心情とできごとのつながり
- (2) 心情は必ず何かあるべきこととつながっているので、ある心情が生じた原因になるべきことをつかみ、その心情が次に起ることとどう関連していくかをつかむようにします。

(2) 心情と情景のつながり

「心情のつかみ方」でもふれましたが、物語や小説では、しばしば登場人物の心情が、例えば、ほがらかでなやみのない気持ちを晴れた空をえがくことで表したりするように、情景の表現と重ねて表されることがあります（**情景一致**）。ですから、情景の表現をただの情景表現とは受け取らずに、何らかの心情の反映になつていなかを意識して、読みとりをすることが心がける必要があります。

性格（人がら）のつかみ方

物語や小説の登場人物は、そのひとりひとりが、軽重の差はあるても、それぞれの特徴をになって作品中で行動します。その特徴となる性格（人がら）が、物語の展開や、主題を支えているのです。その意味で、登場人物の性格の読みとりは、読解上ひじょうに重要な作業になります。

性格のつかみ方は、おおむね次の通りです。

- (1) 登場人物（書き手）の心情が直接表現されている部分に着目する。
- (2) 登場人物（書き手）のものの見方や考え方が述べられている部分に着目する。
- (3) 登場人物（書き手）の行動や動作などから読み取れる心情に着目する。
- (4) その登場人物に対する周囲の人間の態度や言動などに着目する。

◆ 確認問題 ◆

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

叔父さんはいろんなことを少年に教えて呉れた。岬に生えている草の名や、鳥や虫の名を叔父さんは指さして教えた。それから部屋のなかで、机につんだ本をひろげて、一部分を読んで聞かせたり、わかりやすく説明して呉れたりした。叔父さんの机の上には、きちんと折りたたんだネルの布に、古風な大きな懐中時計が置いてあつた。その^{*}竜頭は菖のような形をしていた。叔父さんの声は、近くで話しているくせに、遠くから聞こえてくるような響きをもつていた。ある日曜日、叔父さんとハゼを釣つていたとき、少年は足をすべらせて、岩角でくるぶしを切つた。血がたくさん出て、半泣きになつていると、叔父さんは岩の上から、へんに眞面目な声になつて言つた。

「海の水につけるんだ。早く降りてつけなさい」

少年が降りてゆくのと一緒に、叔父さんも岩を降りてきた。片足をつめたい水につつこむと、傷口にじんとしみて、鮮紅色の血がゆらゆらと水に溶けた。岩角に手をかけて、少年は痛みをこらえて、じつとそれを見つめていた。頭の上から叔父さんの声がした。

「そら。きれいだろ」

血が紅い煙のように、揺れながらぼやけていた。そして傷口からまた赤い血が、淡青の水の色にふき出でていた。叔父さんは身体を曲げるようにして、それを灰色の眼でじつと眺めていた。^①少年は俄かに、恐いようなかなしいような気持ちになつて、半分泣き声でさけんだ。

「まだ入れとくの。まだ？」

20

15

10

5

(注) 竜頭 || 時計などで、針を動かしたりするためのつまみ。
 叔父さんはその声をきくと、^②急にやさしい顔になつて、少年を抱きあげた。用心しながら岩へ上つて、小屋まで抱いたまま歩いて行つた。そして薬を戸棚から出して、ていねいに綱帯とだなをしてくれた。
 <梅崎春生「午砲」より>

（3） 「叔父さん」はどんな人だと想像されますか。次のようにまとめたとき、□に入るふさわしいことばを、「う人」という形で、書いて下さい。

か。「我にかれり、から。」という形で、書いて下さい。

我にかれり、から。

（1）――線①「少年は俄かに、恐いようなかなしいような気持になつて」とあります。それはなぜですか。その理由を次のようにまとめたとき、□に入るふさわしいことばを、二十字以内（読点も字数に數えます）で書いて下さい。

「叔父さんが他のことに気をとられて、□から。」

（2）――線②「急にやさしい顔になつて」とありますが、なぜです。

か。「我にかれり、から。」という形で、書いて下さい。

我にかれり、から。

「叔父さん」はどんな人だと想像されますか。次のようにまとめたとき、□に入るふさわしいことばを、「う人」という形で、二十字以内（句読点も字数に數えます）で書いて下さい。

「ときどき自分の世界にとじこもつてしまつが、
 まだ入れとくの。まだ？」

人	。			